



TITLE:

第8章あとがき

AUTHOR(S):

大谷, 隆一

CITATION:

大谷, 隆一. 第8章あとがき. 京都大学高等教育叢書 2001, 12: 126-127

ISSUE DATE:

2001-12-27

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53659>

RIGHT:

第8章 あとがき

大谷隆一

昭和 44 年頃に起きたいわゆる学園紛争は、京都大学工学部・工学研究科の管理運営、研究、教育の諸問題について少なからず変革を余儀なくされるほどに大きな影響を及ぼした。教育の面では、教授の口述を一方的にノートに筆記する独特の講義、多数の通年必修科目からなる学科固定の専門教育カリキュラム、研究と一体化した教育内容・方針、画一的なエリートを養成するための教育目標等、に対して学生が感じていた息苦しさが爆発した。彼らの言分は、別の表現をすれば、「学生は単なる大学の通過者ではない。知識を伝授し、学問を継承するために講義をするのなら、学生がそれに対して知的刺激を感じ、教授に対して人間的反応を示すことができるように配慮すべきだ」というものであった。これは、少し大袈裟に言えば、戦前から続いてきた帝国大学の教育に対する反抗であった。結局、教科書を使った講義、教授以外の教官の講義・演習・実習・実験への参画、必修科目の大幅な削減、個性を尊重したカリキュラム、ガイダンス等が導入された。遅れ馳せながら新制大学の教育感覚に移行したと思われた。しかし、これ以前の教育を受けた教官のなかには、依然としてかつての授業を懐かしむ心情が残ってはいないか、それが無意識のうちに大衆化された京都大学教育の在り方について感覚的なギャップを生じることになってはいないか、自己評価をしている。

その後、学科単位でカリキュラム委員会等が設置され、学部教育の見直し・改革の作業が継続的になされるようになってきた。これで教育カリキュラムとしては責任を果たしたと思っていたところが、新制大学の特徴である教養部教育に関してほころびが生じた。これには、教育システム・運営機構に起因する教職員側の課題の他に、一般教養、教養的知識に関する学生側の感覚のずれ、関心度の変化からくる課題が蓄積したためと考えられる。教養部廃止・四年一貫教育体制によって改善することになったが、内容の改革が容易には推進しない。かといって外枠の制度変革に文句を付けるのは筋違いである。われわれは専門科目のみに責任を持つのではなく、専門基礎科目は勿論、外国語科目、人文社会学系科目についても学科・学部の教育目標に係わる中核科目として内容を吟味し、プログラムを構築しなければならない。

ここまでくれば学部教育に大きな問題はないはずだ、といえるかどうか。本報告書が纏めたファカルティ・ディベロップメント (FD) は、専門科目を中心とした学部教育に焦点を合わせている。教官のなかには、少し以前から自分の担当する講義について学生のアンケートを取っており、その傾向はよく解ったから今さらアンケートでもなかろう、われわれは教官なのだからどんな形式であれシンポジウムで議論しないと理解できないというものではない、あるいはもっと本質的な問題を議論すべきである、などの意見があるかもしれない。仮にそうだとした場合でも FD の課題は要素レベルのものと組織レベルのものに分けることができ、それぞれに種々の課題があり、その解決のための出発点はファカルティとし

て明示された方法で課題を抽出し、可視化・成文化した形でそれを認識することから始まる、といわれている（本報告書第2章 2.6「FD の必要性」参照）。そうはいうものの、今後、FD 活動は何をどこまですればいいのか。アンケートの内容・収集方法には改良の余地がある、シンポジウムへ学生を直接参加させるべきである、シンポジウムに関する参加教官の意見を整理し解析すべきである、などの意見はもつともであり、今後学科毎になされる継続的 FD に反映されるのが望ましい。この意味においても建築学科を含めてほぼ全学科にわたって同一形態で実施してきた、また今年度最後に実施する予定の電気電子工学科のシンポジウムに至るまで、一連の FD は試行である。これからは、できる限り多くの学生の学習意欲を沸き立たせることができるような工夫をすること（FD の課題3）、学部教育と大学院教育の相違および関連を明確にすること（課題4）、ファカルティの理念・発展を明示するために、各学科の教育目的・目標・方針を成文化すること（課題5）、さらに、それを実施するための組織を整備し、具体的な教育プログラムを立案し、実行し、評価し、改善するサイクルを継続させること（課題6）、に展開していくことが要望されている。

最後に、本報告書の出版企画、原稿執筆、編集にたずさわられた新工学教育プログラム実施検討委員会の委員、今後これを頒布される関係機関の各位に感謝する。また、アンケート調査やその整理に時間を割かれた各学科の関係者をはじめ、シンポジウムの準備に協力いただいた工学部等事務部の方々、シンポジウムに参加された先生方に対して敬意を表す。さらに、これからの学部教育に対して責任ある立場に就かれる方々の大いなる努力に期待を寄せたい。